

『禅のこころ-曹洞宗-』

ねはんじやくじょう 涅槃寂靜

平成29年9月第2週放送

“涅槃”とは、「ニルヴァーナ」という古いインドの言葉の訳で「煩惱の炎が吹き消された状態」をいいます。“寂靜”は、「心が静かで落ち着いた様子」をさします。

「涅槃寂靜」は、仏教の特徴を示した旗印である“法印”と呼ばれるもののひとつです。“諸行無常”・“諸法無我”・“涅槃寂靜”の三つを「三法印」、それに“一切皆苦”を加えた四つを「四法印」といいます。

この「法印」は、いずれも大切なのですが、特に“涅槃寂靜”は、仏教が目指す方向性を示しています。仏教は「静けさ」をめざす宗教であるということです。

もとより、“涅槃寂靜”すなわち「煩惱の炎が吹き消され、心が静かに落ち着いている状態」は、体験の世界のものです。実際に自らが体験し、味わうべきものであり、言葉では表しきれません。

言葉として表現してしまうと、“涅槃寂靜”という概念が一人歩きし、それにとらわれてしまうおそれがあります。「涅槃寂靜の境地に至りたい」という強い思いにとらわれてしまうと、私たちの心は静けさとは対極なものになってしまいます。

仏教では“言葉”の用い方をとても慎重にしますが、あえて“涅槃寂靜”という言葉掲げるのは、仏教は「静けさ」を目指す宗教であると同時に、“涅槃寂靜”が、他の法印、すなわち“諸行無常”・“諸法無我”・“一切皆苦”と密接に関わり合っているからなのです。

それらすべてが示しているのは、「自分中心の思いを離れる」ということです。

“諸行無常”「すべてのものは移り変わる」という真理は、変わらない自分がいるという思い込みを破ります。

“諸法無我”「わたしたちはすべてのものとかかわりあっており、永遠不変の自分はいない」という教えは、強固な自我の認識を砕きます。

“一切皆苦”「すべてのものは苦しみである」という認識は、苦しみの根っこにある、自分中心の思いに気づかせてくれます。

このような自分中心の認識や、自我という思い込みは、心をざわつかせて「静けさ」から遠ざけてしまうのです。

これらの法印をしっかりと認識し、その教えにしたがって日々行じていき、自分

『禅のこころ-曹洞宗-』

中心の思いから離れたとき、涅槃寂静の「静けさ」は、自ずと立ち現れるものなの
だと思えます。

— 終 —